Kadokawa Comics A
Fate/Zero フェイト/ゼロ 3
漫画 真じろう
原作 虚淵玄(ニトロプラス) TYPE-MOON

聖杯戦争の舞台、冬木市の倉庫街で続いていた激しい戦いは、
ついに最終局面を迎える。
令呪により操られたランサーと、
暴走するバーサーカーの猛攻により
手負いのセイバーは窮地に立たされるのだった。
そして、戦闘を見つめていた
最後のサーヴァント"キャスター"も行動を開始する。
胎動する殺意の波動とともに、
新たなる局面を迎える運命の第三巻!!

9784047158191
1920979005600
ISBN978-4-04-715819-1
C0979 ¥560E
定価:本体560円(税別)
発行:角川書店
KCA345-3
角川書店

Kadokawa Comics A

Fate/Zero 3

フェイト/ゼロ

漫画 真じろう 原作 虚淵玄(ニトロプラス)/TYPE-MOON

Kadokawa Comics A

Fate/Zero フェイト/ゼロ 3

漫画 真じろう
原作 虚淵玄/TYPE-MOON

CA345-3
角川書店

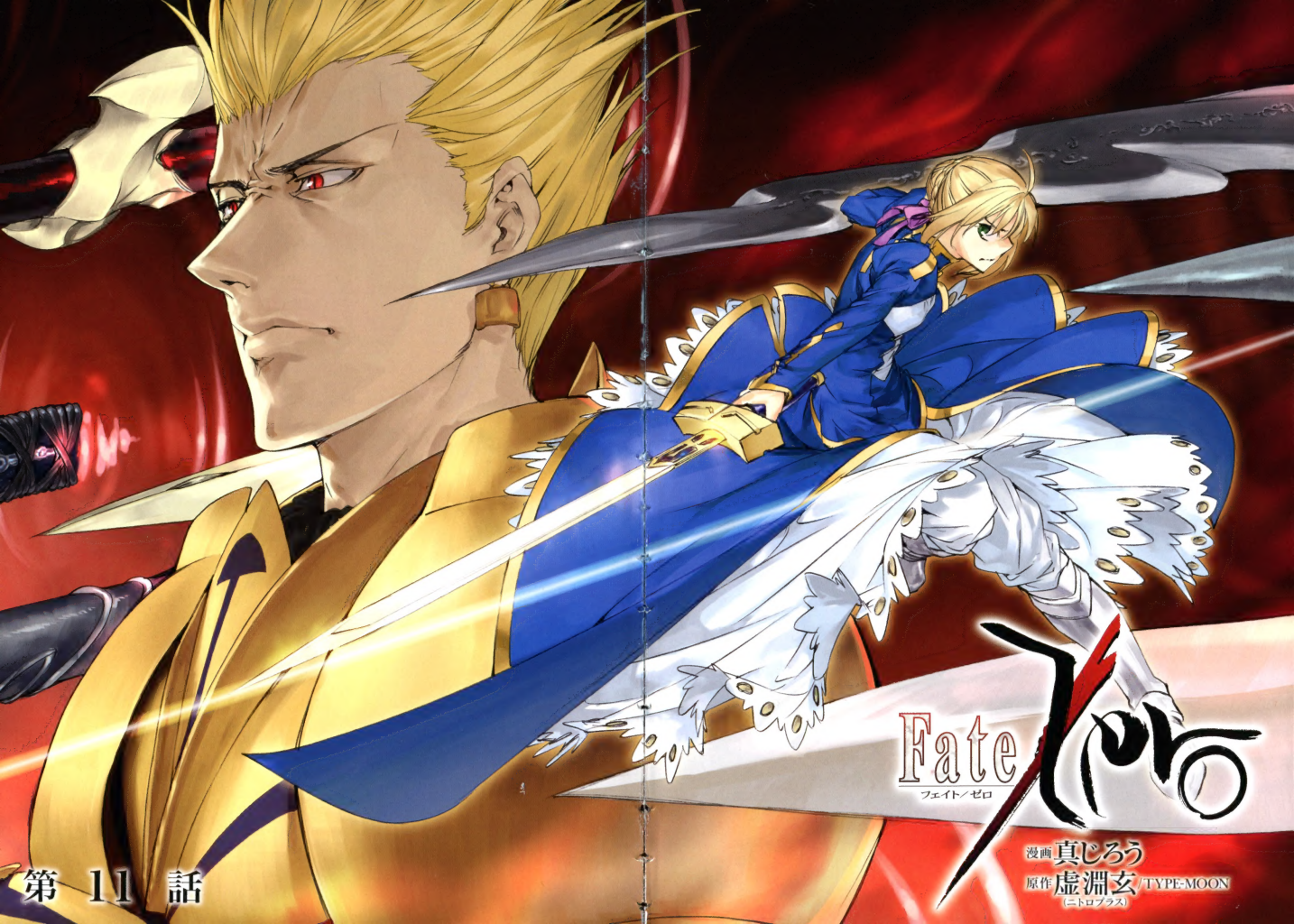
第 11 話
001

第 12 話
031

第 13 話
061

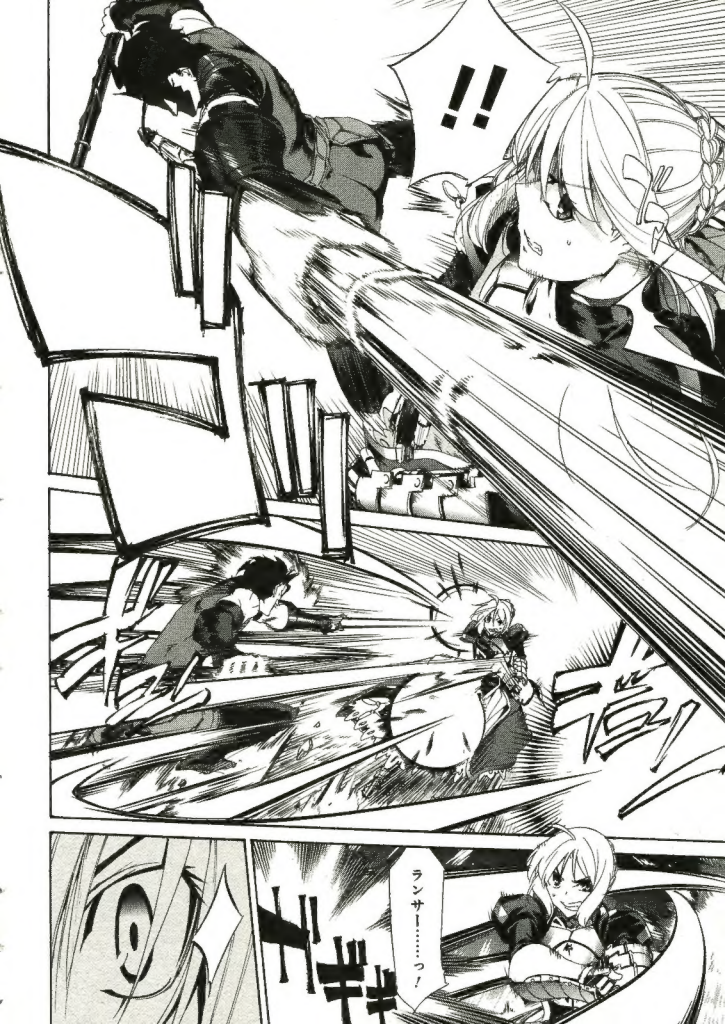
第 14 話
093

第 15 話
127


Fate/ゼロ
フェイト/ゼロ
漫画 真じろう
原作 虚淵玄/TYPE-MOON
(ニトロプラス)
第 11 話

ランサー
バーサーカーを掩護して
セイバーを殺せ
令呪をもって命ずる

……
ギュ


!!
ランサー……っ！

……ッ
アイリスフィール
この場は私が
食い止めます
……セイバー……泣まん……

その隙に――
その隙にせめて
貴女だけでも
離脱してください
出来る限り
遠くまで……！
アイリスフィール！
どうか――
大丈夫よセイバー
あなたのマスターを
信じて
切嗣が――
この場に
来ている？

切嗣に言われた通り
私たちは華々しく戦った
現に今
セイバーはこの戦場の
焦点にある
誰もがセイバーの窮地に
目を釘付けにしている
これは切嗣が
目論んだ通りの展開
即ち――
いま私たちは
敵に対して優位にある
だから――
どうかお願い
あなた
……

……舞弥
僕のカウントに合わせて
アサシンを攻撃しろ
制圧射撃だ
ギュ
アイリの保護が最優先
セイバーがアイリを
護りきれなくなった以上は
もう一刻の猶予もない
今この場で
ランサーの
マスターを殺す
……了解
状況を打破できる
手段は他にない

――四
ーを喪ったランサーが
という反応をするかは
予想できないが
セイバーを倒されれば
ほぼ
ほぼ再起的な脅威が
バーサーカー単体になれば
セイバーとアイリを連れて
脱出するくらいは可能だろう
残る問題は自身の安全
アサシンのすぐ膝元で
発砲するという無謀を
断行するんだからな

――三

予想外の狙撃手の出現に

一瞬

動揺を見せた

ものの

さすがは

プロ

――二

だが

アテが

外れれば――……

――一

――他に

選択肢は

ない

ヒュウウ
フン
――ほう？
なかなかどうして
根性のあるヤツ
グッ…

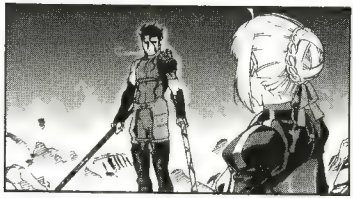
神牛に蹴り潰されながらも
身を捻って戦車の軌道から
避けおったわ！
この威力――
対人宝具でなく
対軍宝具の域にある
今の疾走ですら
明らかに手を
抜いてた
その気があれば私も
ランサーも
蹄と車輪の
餌食になって
いたはず…！
とまぁこんな具合に
黒いのにはご退場
願ったわけだが――

ランサーのマスターよ
どこから覗き見しておるのか知らんが下衆な手口で騎士の戦いを穢すでない
……などと説教くれても通じんか
魔術師なんぞが相手では
ランサーを退かせよ
なおこれ以上そいつに恥をかかすというのなら余はセイバーに加勢する
二人がかりで貴様のサーヴァントを潰しにかかるが――
どうするね？

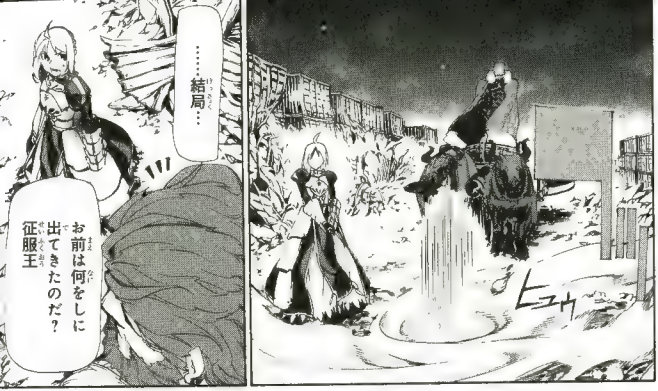
……
ゴゥ!!
撤退しろ
ランサー
今宵は
ここまでだ
7

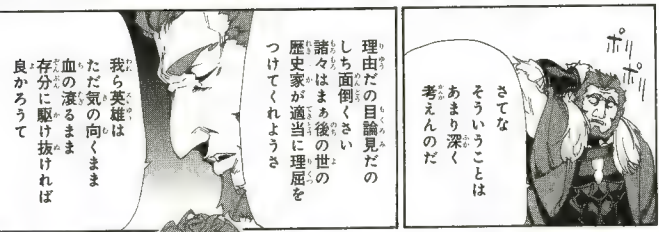
なぁに
戦場の華は
愛でるタチでな

ガラ
感謝する
征服王



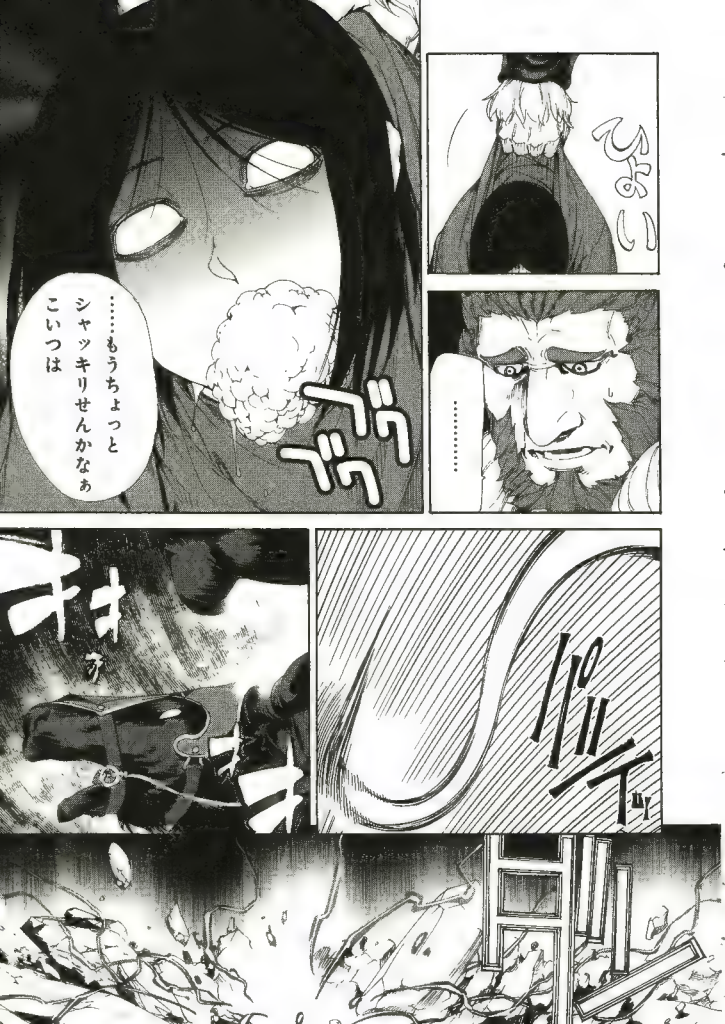
決着は
いずれまた――

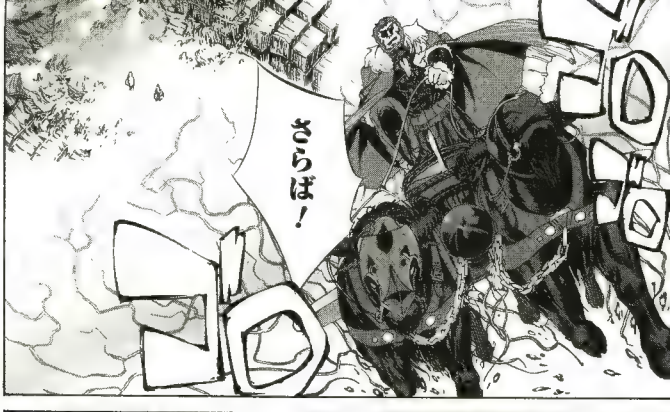

ヒュウ
……結局…
お前は何をしに出てきたのだ？征服王

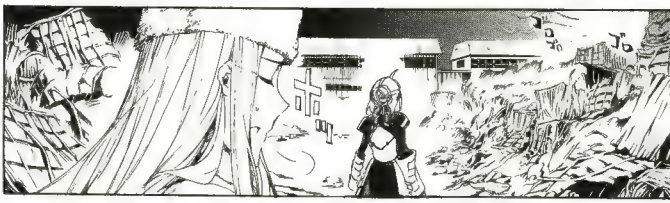

ポリポリ
さてなそういうことはあまり深く考えんのだ
理由だの目論見だのしち面倒くさい諸々はまぁ後の世の歴史家が適当に理屈をつけてくれようさ
我ら英雄はただ気の向くまま血の滾るまま存分に駆け抜ければ良かろうて

……それは王たる者の言葉とは思えない
ほう？我が王道に異を唱えるか
まぁそれも必定よな
全て王道は唯一無二
王たる余と王たる貴様とでは相容れぬのも無理はない
いずれ貴様とはとことんまで白黒つけねばならんだろうな

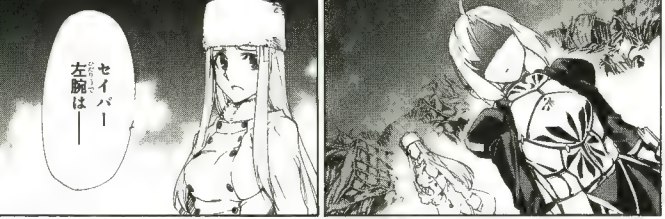
望むところだ
何なら今ここの場でも！
よせよせ
そう気張るでない
イスカンダルたる余は
勝利を盗み取るような
真似はせぬ
……
セイバーよ
まずはランサーめとの
因縁を清算しておけ
その上で
貴様かランサーか
勝ち昇ってきた方と
相手をしてやる
では騎士王
しばしの別れだ
次に会うときは
また存分に
余の血を熱く
してもらおうか
……おい坊主
貴様は何か
気の利いた
台詞はないのか？

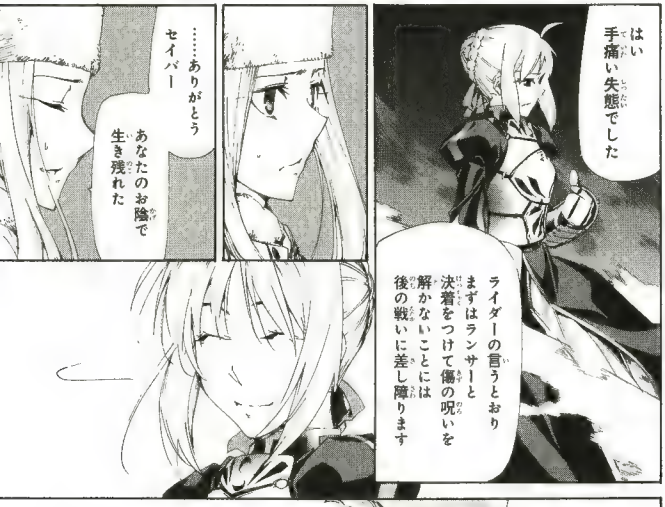

なにい
……
……もうちょっと
シャッキリせんかなぁ
こいつは
ゴクゴク
バリィ
ボボボ

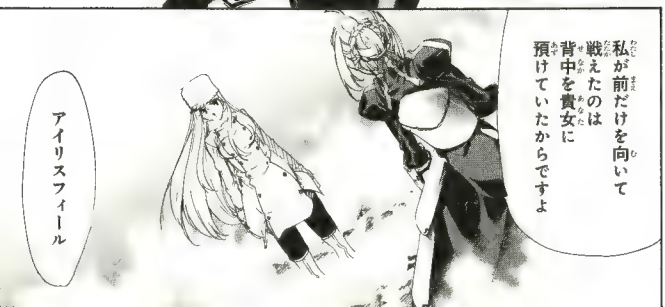

さらば！



序盤からここまで
派手なことになった
聖杯戦争なんて過去に
あったのかしらね…


セイバー
左腕は――


はい
手痛い失態でした
ライダーの言うとおり
まずはランサーと
決着をつけて傷の呪いを
解かないことには
後の戦いに差し障ります
……ありがとう
セイバー
あなたのお陰で
生き残れた


私が前だけを向いて
戦えたのは
背中を貴女に
預けていたからですよ
アイリスフィール

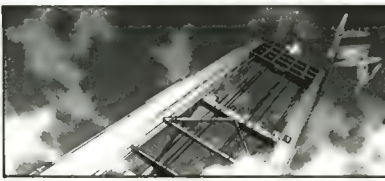
強くて
優しくて…
遅しくて
――…
自分より一回りも幼い
年端もいかない
少女の姿でありながら
こんな小さな躰で
細い腕で
なのに貴女は
どこまでも騎士であり
英雄なのね…
……そうね
今夜の局面は
これから始まる戦いの
最初の一夜でしか
ありません
勝負はこれからです
アイリスフィール

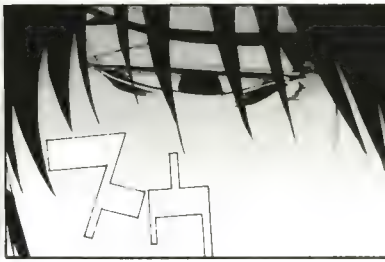
いずれも劣らぬ強敵揃い
異なる時代から
招き寄せられた
英雄たち……
ただの一人として
尋常な敵はいない

これが……
聖杯戦争

第11話　END

第 12 話





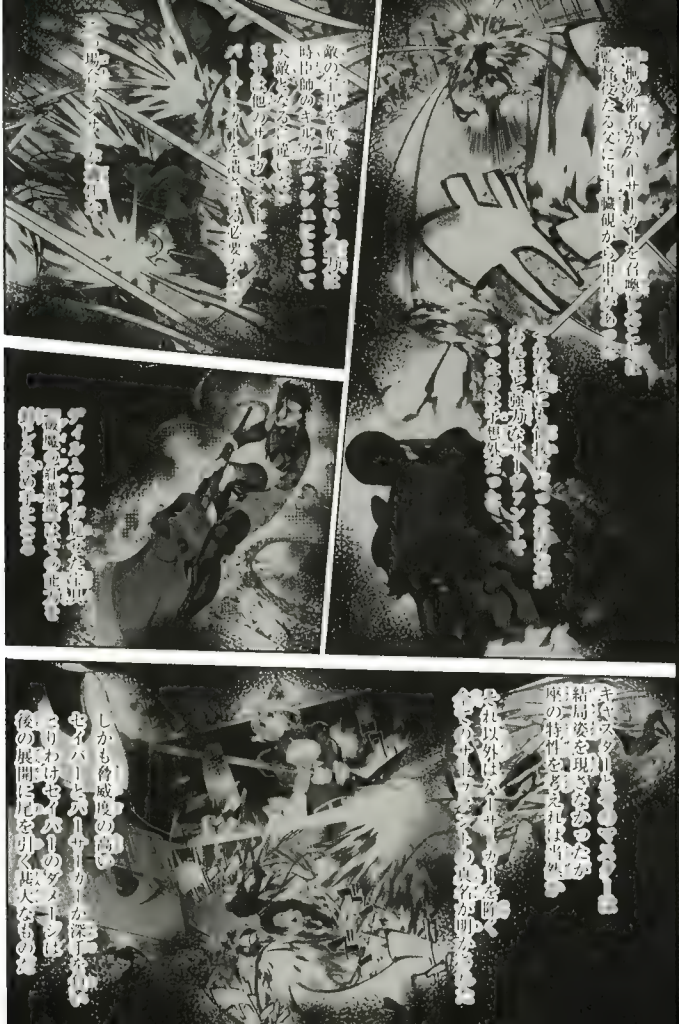
Dプランに沿って
あとは現場の
判断で頼む――

……

ロード・エルメロイが
第四次イスカンダルの聖遺物を
入手しながら紛失した
という情報は時計塔の闇深く
ひそかにもたらされていた

にも拘わらずイスカンダルが
ライダーとして参戦し
またそのマスターとして
ウェイバーなる少年に対して
ランサーのマスターが
非常に深い因縁を匂わせていた

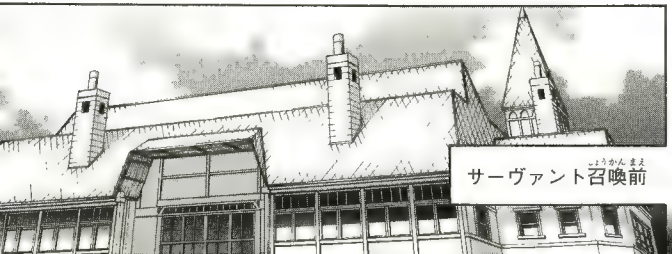
――まず間違いなく
ランサーのマスターは
ロード・エルメロイ
あの少年に聖遺物を奪われた後で
新たに英霊アイルランドの
神の槍を入手したと思われる


キャスター
結局姿を現さなかったが
座の特性を考えれば当然
それ以外はアーサーカを除く
セイバーとアーチャーが深手を負い
とりわけセイバーのダメージは
後の展開に尾を引く甚大なもの
しかも脅威度の高い

状況は我々が
断然優位にある
ギルガメノシュが盛大に
宝具をひけらかす羽目に
なったのはまずかったが
その真名までは
露見せずに済んだし
アサシンが健在であるのも
気付かれていない
……
さほどの障害も
予見されない…
時臣師は勝利を
得るだろう
何を期待するほどの
ことでもない
凡庸な任務だ…
恐れながら
綺礼様

教会の外で
気になるものを
見つけましたので
ご報告を
——使い魔か？
はい
結界の外では
ありましたが
明らかにこの教会を
監視する意図で
放たれたものかと
！
ぐぬぬぬぬ…
魔術師という人種は
世間一般のネクラの巣窟と
相場が決まっているが
限度というものがある
機械的な眼像を
埋め込むという発想は
まともな神経の魔術師には
思いつかないはずだが
教会に保護された事実を
単純に
狂信ではないから
監視…ってか
ヴェルナーが目にいれても
痛くないってか！
36

―282:14:41



カタ
カタ
カタ
「時計塔」からの最新の報告だ
"神童"ことロード・エルメロイが新たな聖遺物を手に入れたらしい
これで彼の参加も確定のようだな
ふむ
これは歯応えのある敵になりそうだ

これで既に判明しているマスターは我々も含めて五人
この期に及んでまだ二人も空席があるというのは不気味ですね
なに相応しい令呪の担い手がいないというだけのことだろう
時が来れば聖杯は質を問わず七人を用意する
そういう員数合わせは概ね小物だからな警戒には及ぶまい
……
二年の期間を仰事してよく解ったが時臣師は準備は用意周到だが実行に移す段になると足元を見なくなるという癖がある
そういう此末な部分に気を配るのは私の役目なのだろう
まぁ用心について言うのなら綺礼この屋敷に入るところは誰にも見られていないだろうね？
表向きには我々は既に敵対関係なのだからね
ご心配なく可視不可視を問わずこの屋敷を監視している使い魔や魔導器の存在はありません
それは――
――それは私が保証いたします

ボゥ
いかな小細工を弄そうとも
闇諜の英霊たるこの
ハサンめの目を瞑魔化す
ことは敵いませぬ
我がマスターの
身辺には現在いかなる
追跡の気配もなし……
どうかご安心
くださいますよう
マスターの身元は
わかりませんが
現界したサーヴァントの
数とその座については
召喚がいずこの地で
行われようと
「霊器盤」によって
監督役である父に
伝わります
父によれば
現界しているサーヴァントは
いまだ私のアサシン
一体のみ
他の魔術師たちが
行動を起こすのは
まだ先のことと
思われます

うむ
だがそれも時間の問題だ

いずれこの屋敷の周囲には
他のマスターの放った
使い魔どもが右往左往する
ようになるだろう

ここと間桐邸
それにアインツベルンの
別宅はすでにマスターの
根城として確定
しているからな

御三家に対する外来の
魔術師たちの
アドバンテージは
その正体が秘匿
されている点にある

それゆえ聖杯戦争の前段階では
どの家門でも密偵を使った
諜報戦に明け暮れることになる

残る二人の謎のマスターが
想定以上の策略家であっても
そういう相手にはアサシンが
最大限の力を発揮する

この場はもういい

アサシン
引き続き
外の警戒を

御意

手はず通りアサシンには各陣営の作戦行動方針サーヴァントの弱点などについて徹底的に調査させ報告を行え
私はその情報をもとに必勝法を検証し自身のサーヴァントで各個撃破していく
はい
あとは師のサーヴァント召喚のみですが…
希望通りの聖遺物が今朝ようやく到着した
遥かな太古
この世で初めて脱皮した蛇の抜け殻の化石

私が招くサーヴァントは
すべての敵に対し
優位に立つだろう
およそ英霊である限り
アレを相手にして
勝ち目はない
きっそく今夜にも
召喚の儀を行う
他のマスターの監視が
ないというのなら
君も同席するといい
それにお父上も
父も ですか？
そうだ
首尾よくアレを
呼び出したなら
その時点で我々の勝利は
確定する
喜びは皆で
分かち合いたい

まだ他にも
続きがあるようですが
ん？ ああ
それは別件の調査でね
最新のニュースじゃない
アインツベルンの
マスターになるであろう
男について調査を
依頼しておいたんだ
――今から九年ほど
昔になるか
純血の血統を誇ってきた
アインツベルンが
唐突に外部の魔術師を
婿養子に迎え入れた
協会でも噂になったが
真意を見抜いたのは
私と間桐のご老体
ぐらいなものだろう
錬金術ばかりに特化した
アインツベルン家の
魔術師は荒事には不向きだ
過去の聖杯戦争での
敗北もすべて
それが原因だった
それでいいよ
遠坂も痛手を
切らしたのだろう
招かれた魔術師
というのが
衛宮切嗣なる
〝いかにも〟な
人物だった

衛宮切嗣……
……聞き覚えがあります
かなり危険な人物だとか
ああ
"魔術師殺し"の衛宮といえば当時はかなりの悪名だった
表向きは協会に属さないはぐれ者だったが上層部の連中は奴を いろいろと便利に使っていたようだ
教会で言うところの代行者のようなものですか？
もっと性が悪い
あれは魔術師専門に特化したフリーランスの暗殺者のようなものだった
魔術師として魔術師を知るが故にもっとも魔術師らしからぬ方法で魔術師を追いつめる……
そういう下衆な戦法を平然とやってのける男だ

魔術師というのはな
世間の法から外れた
存在であるからこそ
自らに課した法を
厳格に遵守しなければ
ならない
だがこの衛宮という男は
徹底して手段を選ばない
魔術師であるという
誇りを微塵も持ち合わせて
いないんだ
こういう手合いは
断じて許せない

誇り……ですか

そう
この男にしても
かつては魔術師と
なるにあたって
厳しい修練を
経てきたのだろう

ならばその苦難を
凌ぎうるだけの信念も
持ち合わせていたはずだ

そういう初志は
たとえ力を得た
後でも決して
忘れてはならない

……

暗殺師の言うことは間違いだ

常軌を逸した訓練に何の目的があるというのか

発狂するほどの愚かさも
この世には存在する！

――ではこの衛宮切嗣は
何を目的に殺し屋などを？

まぁ おそらくは
金銭だろうな

その証拠にアインツベルンに
迎えられて以後は
外道働きも途絶えている

殺し屋ばかりでなく
傭兵としても
相当な荒稼ぎを
こなしてきたと見える

その報告書にもあるだろうが
魔術師の暗殺だけではなく
世界中で小遣い稼ぎを
やっていたらしい

なるほど
世界中のほとんど全ての
紛争地に姿を現している

……この書類
少しお借りしても
いいでしょうか？
ああ構わんよ
私に代わって
吟味してもらえれば
助かる
こちらは今夜の
召喚の準備で
忙しいんでね
ゴゴゴゴ

こんにちは 凛
……
……こんにちは 綺礼
外出かな？
ずいぶんと大荷物な
ようだが
ええ
今日から禅城のお家で
お世話になりますから
学校も向こうから
電車で通います
綺礼はお父様の傍に残って
一緒に戦うんですね
ああ そのために
弟子として招かれた
のだからね 私は

遠坂の後継ぎとして
真っ当な魔術師としての教育が施されている
凛が父の時計に寄せる
敬慕はとりわけ強い
それでもなお不満なのは
自分が死んだ後に
私だけが遠坂の屋敷を留守
しているところにあるのだろう
遠ざけられる
理由も納得しては
いるはず
綺礼 あなたを信じて
いいですか？
最後までお父様を
無事に守り通すと
約束してくれますか？
それは無理な相談だ
そんな約束ができるほど
安穏な戦いであったなら
なにも君や奥様を
避難させる必要も
なかっただろう
……やっぱりわたし
あなたのこと好きに
なれない
凛
そういう本心は人前で
口にしてはいけないよ
君を教育している父親の
品格が疑われるからね

おっ…お父様は
関係ないでしょ!!
いい綺礼!?
もしあんたが手え抜いて
お父様に怪我させるような
ことになったら絶対に
承知しないんだからねっ!
わたしは――
凛!
何をしているの?
そんなに大声を出して

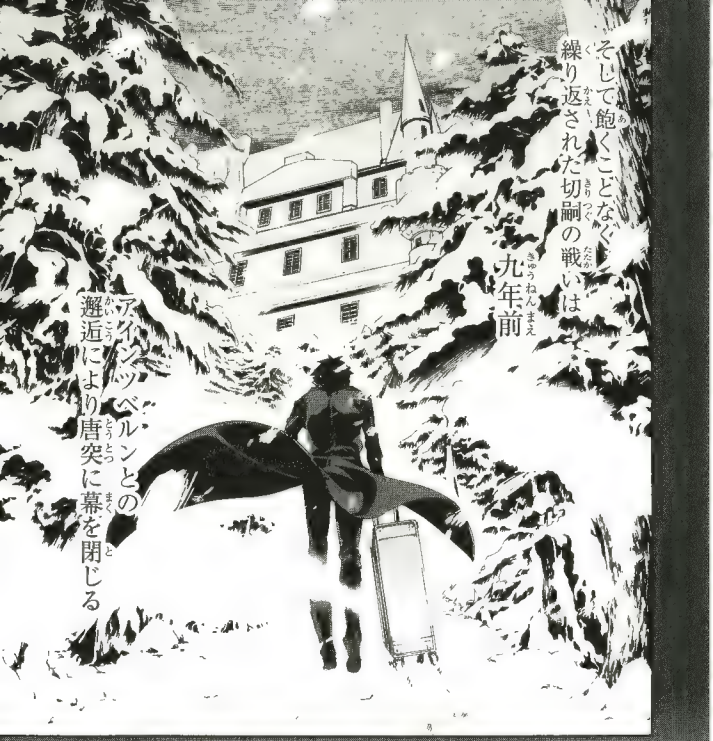
ニャ
――あ、えぇと、その――
お別れの前に
私を激励してくれて
いたのですよ 奥様
ズルズル
荷運びを手伝おう
凛 そのスーツケースは
君には重すぎるだろうから
いいのっ！
自分でできます！

言峰さん
どうか主人をよろしく
お願いします
あの人の悲願を
遂げさせてあげてください
最善を尽くします
ご安心ください

この一面識もない
異端の魔術師に
なぜこれほどまでに
興味を惹かれるのか…
衛宮切嗣の行動は
あまりにもリスクが大きすぎる
フリーランス時代にこなした数々の任務は
明らかにその間隔が短すぎる
準備段階、計画の期間まで
それぞれ常に複数の計画を
同時進行していたとしか思えない
さらにそれに並行して
各地の紛争地に出没しているが
よりによってのタイミングは
戦況がもっとも激化した
時期とよく一致している

まるで死地へと赴くことに
何かの強迫観念があったかのような……
明らかに自滅的な行動原理
間違いなく言える
この切嗣という男に
利己という思考はない
その行動は実利と
リスクの釣り合いが
完全に破綻している
これが金銭目当ての
フリーランサーであるわけがない

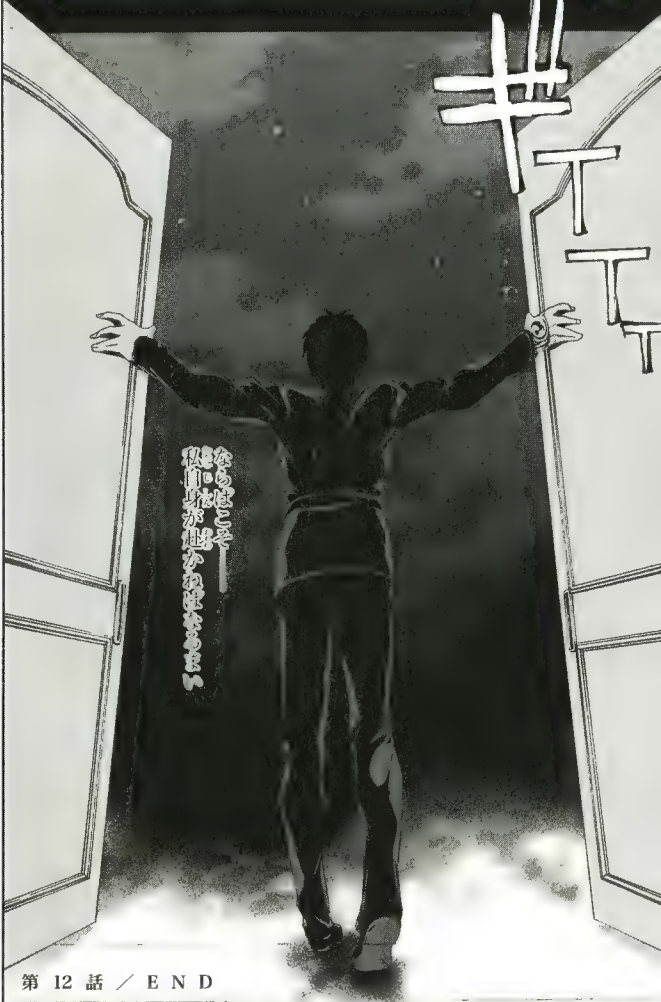
では――何を求めて？
バサッ
誇りのない魔術師
信念を見失った男
――時臣師はそう言っていた
だとすればこの狂信的な
まるで破滅を求めたかのような
遍歴は……
あるいは見失った答えを
探し求めての巡礼
だったのではあるまいか？



つまりそのとき彼は
〝答え〟を得たのだ

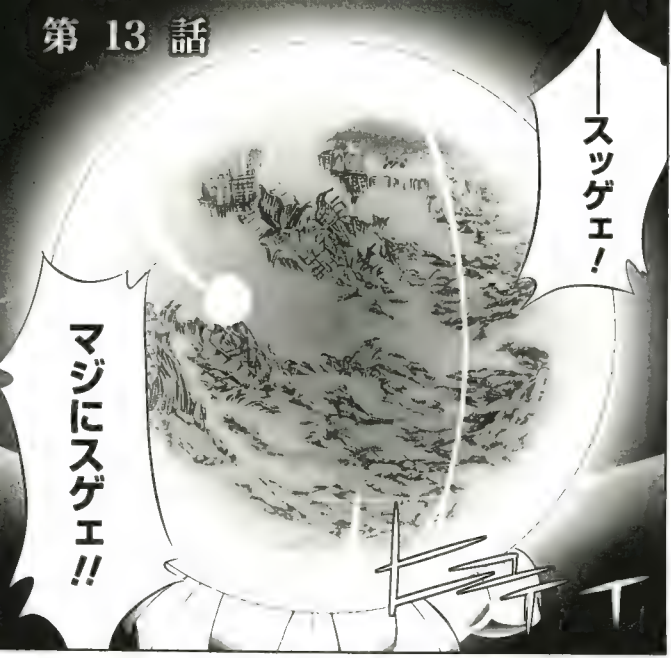
男たちの戦場にやる

何度生まれ変わっても
一度
倉切嗣と対峙しなければならない
たとえそれが
互いの生死を賭した
必滅の戦場であろうとも



第 12 話 ／ E N D

第13話


——スッゲェ！
マジにスゲェ!!

なぁ青髭の旦那
今のアレ全部
リアルなんでしょ？
SFXでも何でもない
ガチだったんでしょ？
たまんねぇ～
プレステなんか
目じゃねぇわ！

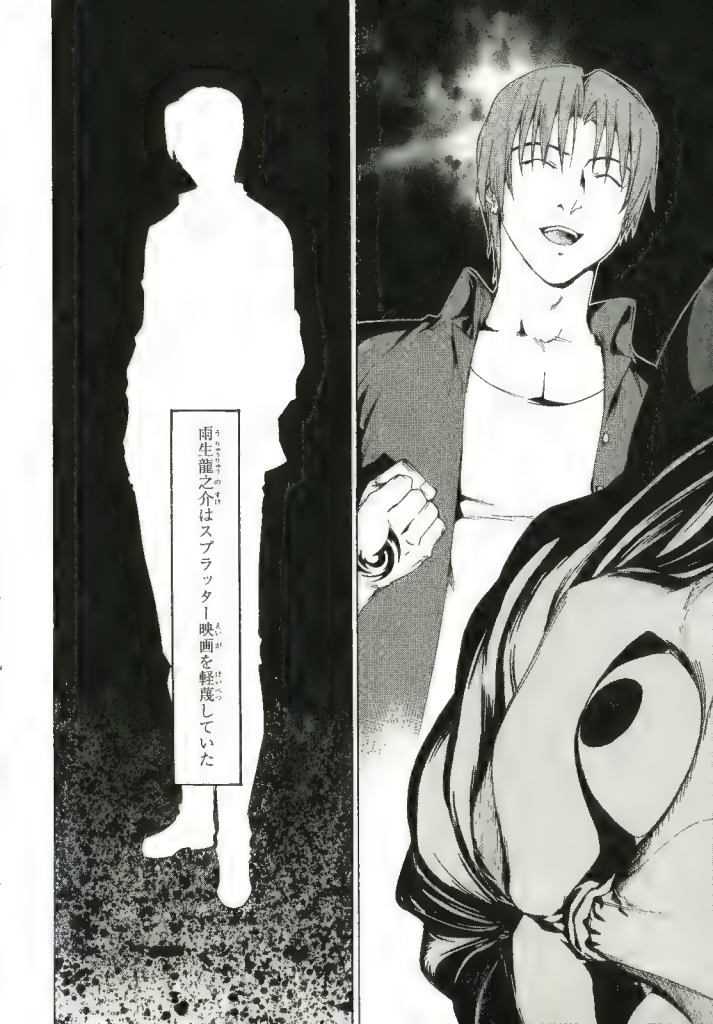
で
セイハイセンソウ
だったっけ？
旦那も今のアレに
噛むんでしょ？
やっぱり旦那も
アレなの？
空飛んだり
光ったりとか？
……旦那？
――叫った

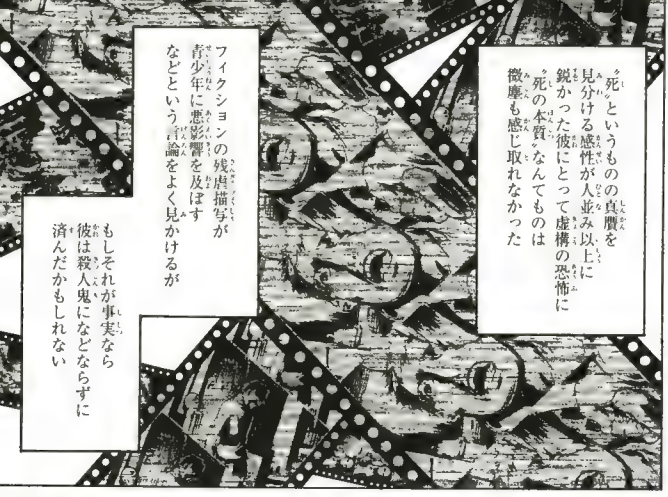
全て叶った
まさか……或いは
とは思っていたが……
聖杯はまさしく
本当に万能であった……
叶ったっ――てぇ？
ええと？
聖杯は私を
選んだのですよ！

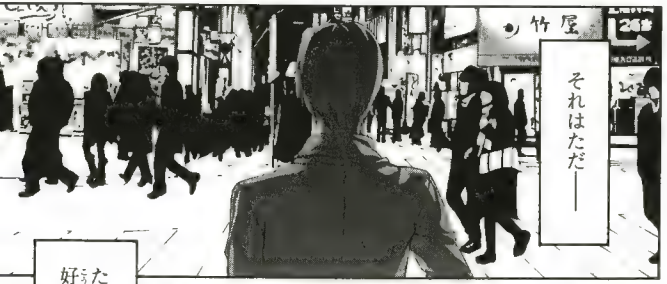
ただの一度も
戦うまでもなく
我々は勝利を
遂げたのです
間違いない
すでに聖杯は我らが
手中にある！
いやオレ……
そのセーハイってやつ
まだ見たことも
触ったことも
ないんスけど
そんなことは
問題ではない！

見たまえ！
彼女こそが答えだ！
……知り合い？
いかにも
彼女こそは我が光
彼女こそは我が導き
彼女が私に命を
我が人生に意味を
もたらした……
あの凛々しき面影
神々しき居住まい……
あれこそは紛れもなく
我が運命の〝乙女〟に
他ならぬ！
かつて
神にすら見捨てられ
屈辱のうちに
滅んでいった彼女が——
今ついに
復活を遂げた！
これが！
これほどの奇跡が
我が願望の成就でなくして
何だというのか!?

なんだかオレも
楽しみになってきたよ
青髭の旦那
うおー
そうだろう！
そうだろうとも！
嗚呼乙女よ
我が聖処女よ……
すぐにもお迎えに
馳せ参じまする
どうか
しばしお待ちを……


雨生龍之介はスプラッター映画を軽蔑していた


〝死〟というものの真価を
見分ける感性が人並み以上に
鋭かった彼にとって虚構の恐怖に
〝死の本質〟なんてものは
微塵も感じ取れなかった
フィクションの残虐描写が
青少年に悪影響を及ぼす
などという言論をよく見かけるが
もしそれが事実なら
彼は殺人鬼になどならずに
済んだかもしれない


竹屋
それはただ――

ただひたすらに切実な
好奇心の結果だった

龍之介はどうあっても
死について知りたかった
動脈出血の鮮やかな赤色
腹腔の内側にあるモノの
手触りと温度
それらを引きずり出されて
死に至るまでに
犠牲者が感じる苦痛
そしてそれが奏でる
絶叫の音色
何もかも本物に勝るものはなかった

龍之介は人ひとりを殺すとなれば
その人物の死を徹底的に堪能し尽くし
ときには絶命させるまで
半日以上も。死に至る過程。を
愉しむこともある
その刺激と経験
一人の死がもたらす情報量は
取るに足らないひとつの命を
生かし続けておくよりも
よほど得るところが大きかった
それを考えれば
雨生龍之介による殺人は
むしろ生産的な行為と
言えるのではないのか
そういう信条で
殺人に殺人を重ねながら
各地を転々と渡り歩いた

法の裁きは恐くはなかった
絞首刑も電気椅子も
どんな結末に到るものなのかは
充分に〝観察済み〟だった
手錠をかけられ虜囚となる感覚は
恐れるまでもない程度に
きちんと〝理解〟できていたし
それでも彼が可直の追跡から
逃げ続けている理由はといえば
ただ単に享楽的に日々の暮らしを
楽しむ方がポジティブで健康な
人として正しい生き方であろうと
思っていたからだ

さて そんな殺人鬼も最近
モチベーションの低下という
由々しき事態に悩まされた
すでに思いつく限りの手法を
試し尽くしてしまった龍之介は
どんな獲物をescape
断末魔を見届けるのにも
もう以前ほどの感動や興奮を
味わえなくなっていたのだった

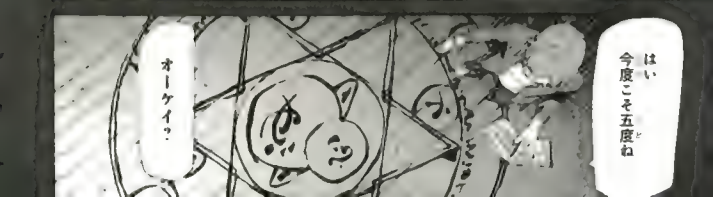
姉ちゃん
見ないうちに随分
やつれちゃってねぇ？
原宿回帰!!と思って
実家に帰ってきたものの
収穫…

慶応二年…
幕末の古書かぁ
なになに…妖術…
伴天連にサタン…
オカルトかよ
……いや…
こういうのも…
生贄を捧げて
悪魔を召喚する儀式…
これって
COOLじゃね？
いよぉっし！
なんかやる気
出てきたぞぉ！

閉じよ閉じよ♪
閉じよ閉じよ♪
繰り返すごとに四度――
あれ 五度？
えーと
ただ消されるトキをー
破却する……
だよなぁ？ うん

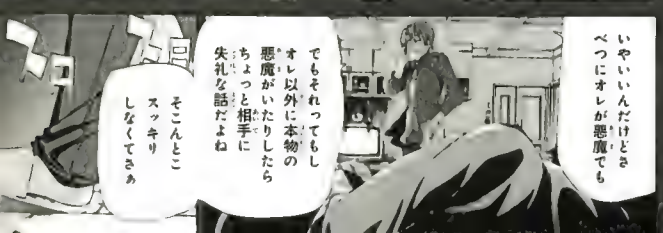
−221・24・48

閉じよ♪
閉じよ♪
閉じよ♪
閉じよ♪
閉じよっ♪


はい
今度こそ五度ね
オーケイ♪

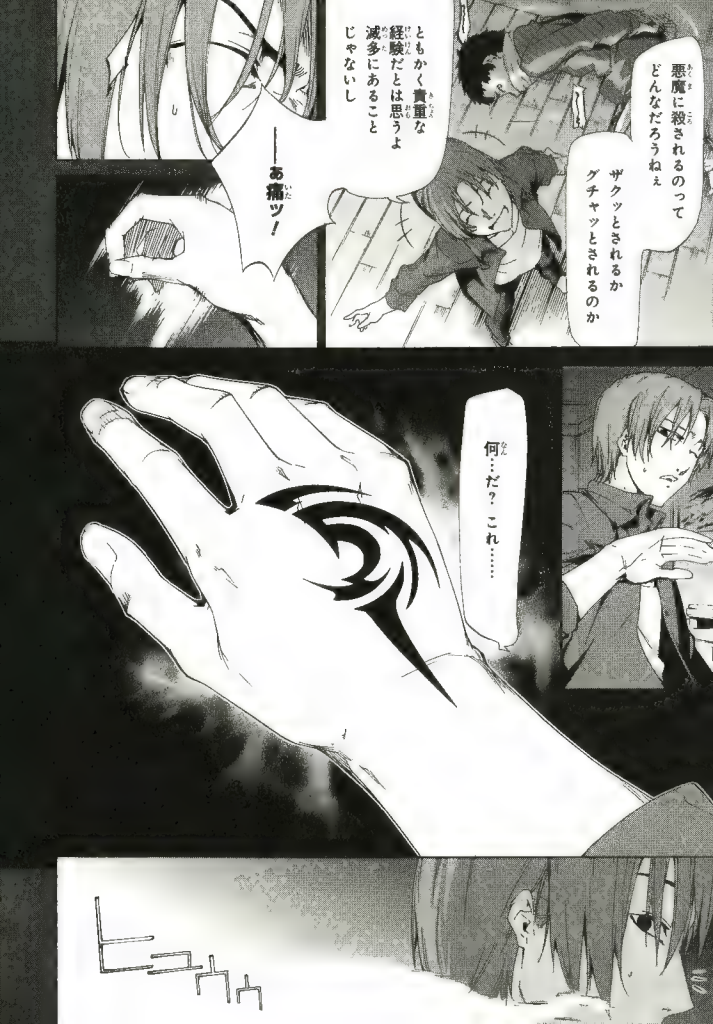
ねー坊や
悪魔って本当にいると思うかい？

新聞や雑誌だときぁよくオレのこと悪魔呼ばわりしたりするんだよね
でもそれって変じゃねぇ？
オレ一人が殺してきた人数なんてダイナマイトの一本もあれば一瞬で追い抜けちゃうのにさ


いやいいんだけどさべつにオレが悪魔でもでもそれってもしオレ以外に本物の悪魔がいたりしたらちょっと相手に失礼な話だよね
そこんとこスッキリしなくてさぁ

「チワッス
雨生龍之介は
悪魔であります！」
なんて名乗っちゃって
いいもんかとうか
それ考えたらさ
もう殺めるしかないと
思ったワケよ
本物の悪魔がいるのか
てもやっぱりホラ
本当に出てきちゃったらさ
何の準備もなくて茶飲み話だけって
てのもマヌケな話じゃん？
だからね 坊や
もし悪魔サンが
お出ましになったら……

ひとつ殺されてみてくれない？
アッハハハハ


悪魔に殺されるのって
どんなだろうねぇ
ザクッとされるか
グチャッとされるのか
ともかく貴重な
経験だとは思うよ
滅多にあること
じゃないし
――あ痛ッ！
何…だ？これ……

!!

――問おう

我を呼び
我を求め
キャスターの座を
依り代に現界
せしめた召喚者……
貴殿の名をここに問う
其は何者なるや？
……

えと
雨生龍之介っす
職業フリーター
趣味は人殺し全般
子供とか
若い女とか
好きです
せい——
はい？
宜しい
契約は成立しました
貴殿の求める聖杯は
私もまた悲願とするもの
必ずや我らの手にする
ところとなるでしょう

…まぁとりあえず
お近づきにご一献
どうデスか

アレ
食べない？

ﾌﾗﾌﾗ

……

ゴ

ああ スゲェ！
それ人間の皮でしょ？
パラ
……？
？？？
？！

――怖がらなくて
いいんだよ 坊や
……
ジリ
ジリ
さぁ坊や
あそこの扉から
部屋の外に出られる
周りを見ないで
前だけを見て
自分の足で歩くんだ
一人で
行けるね？
……うん…

なぁ
ちょっと……

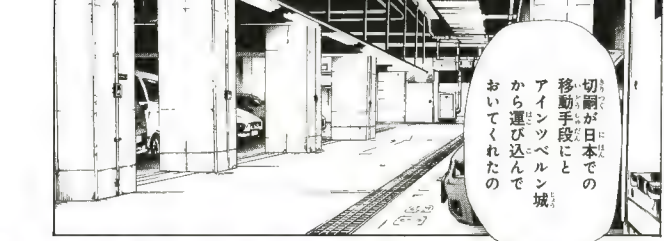
oh.

ガッ
恐怖というものには
鮮度があります
怯えれば怯えるほどに
感情とは死んでいく
ものなのです
真の意味での恐怖とは
静的な状態ではなく
変化の動態――希望が絶望へと
切り替わる瞬間のことをいう

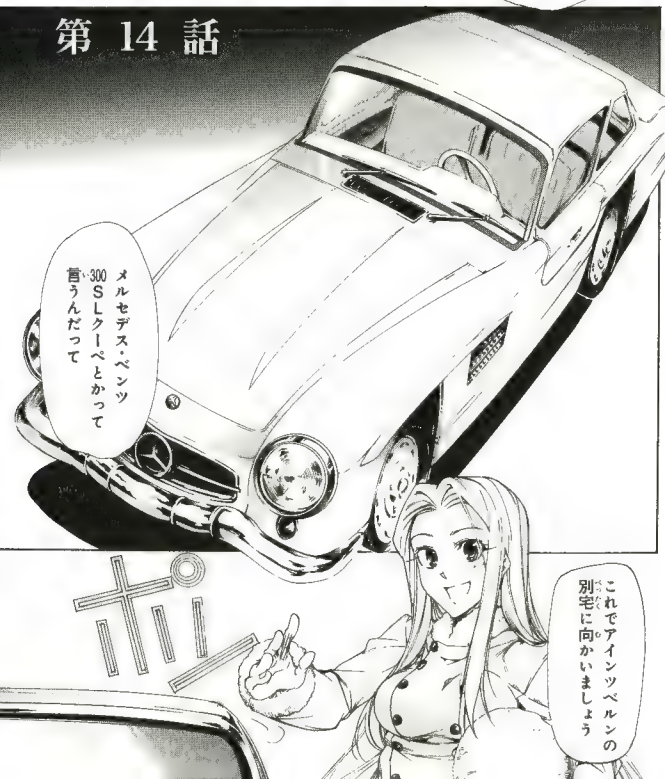
如何でしたか？
瑞々しく新鮮な
恐怖と死の味は
――く――
COOL！
最高だ！
超COOLだよ
アンタ！

オーケイだ！
Super Cool!!
聖杯だか
何だが知らないが
ともかくオレは
アンタに付いて行く！
何なりと手伝うぜ
さぁもっと殺そう！
生贄なんて
いくらでもいる
もっともっと
COOLな殺しっぷりを
オレに魅せてくれ！
リュウノスケと
いいましたか
貴殿のような理解ある
マスターを得られたのは
幸先がいい
これはいよいよ
我が悲願の達成に
期待が持てそうです
あーそういえば
オレまだ
アンタの名前
聞いてない
名前…ですか
そうですね
この時代で通りの良い
呼び名といえば……

第13話　END


切嗣が日本での
移動手段にと
アインツベルン城
から運び込んで
おいてくれたの

第 14 話


メルセデス・ベンツ
300 SL クーペとかって
言うんだって
これでアインツベルンの
別宅に向かいましょう

思いのほか……
達者な運転……
ですね…
コレね 切嗣が
アインツベルンの城に
持ち込んできてくれた
玩具の中で一番の
お気に入りなの
お城じゃ中庭を
グルグル回るだけ
だったから
こんな広い所を
走るのは初めてよ

む 待ちなさい アイリスフィール

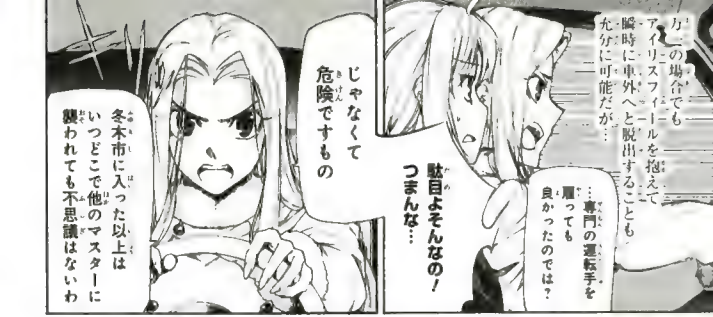
さっきまで貴女は道の左側を走っていませんでしたか？

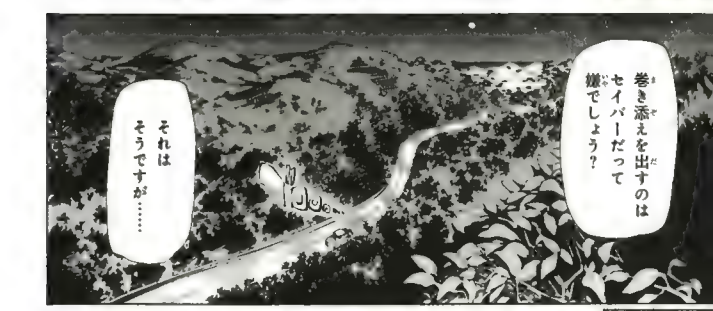
あ そうよね

アイリスフィール まさか道路標識を気にとめていない？

そもそも道路を走るのに法律があるという知識さえ持ち合わせているのかどうか……

赤信号でも減速のみでよく無事に市街地を抜けられたものだ


万一の場合でも
アイリスフィールを抱えて
瞬時に車外へと脱出することも
充分に可能だが…
…専門の運転手を
雇っても
良かったのでは？
駄目よそんなの！
つまんな…
じゃなくて
危険ですもの
冬木市に入った以上は
いつどこで他のマスターに
襲われても不思議はないわ


巻き添えを出すのは
セイバーだって
嫌でしょう？
それは
そうですが……

え？
止まって！

ギィ…

……
私の後について貴女も
車外に出てください
なるべく側を
離れないように
あの娘…キャスター…か？
……しかし……
これが戦いに赴いた者の
表情だと？

お迎えに上がりました
聖処女よ
な……
セイバー
この人あなたの知り合い？
いや見覚えはありませんが――

……おおお
御無体な！
この顔を
お忘れになったと
仰せですか!?
知るも何も
貴公とは初対面だ
何を勘違い
しているのか
知らぬが人違い
ではないのか？
おお…
おおお……
私です！
貴女の忠実なる永遠の僕
ジル・ド・レェにて
御座います！
貴女の復活だけを祈願し
いま一度貴女と巡り会う
奇跡だけを待ち望み
こうして時の果てにまで
馳せ参じてきたのですぞ
ジャンヌ！
ジル・ド・レェ……!?

貴公が自ら名乗りを
上げた以上は私もまた
騎士の礼に則って
真名を告げよう
我が名は
アルトリア
アーサー・ペンドラゴンの
嫡子たるブリテンの王だ
私は貴公の名を
知らぬし
そのジャンヌ
などという名にも
心当たりはない
おおぉ！
オオオオオッ!!
なんと痛ましい！
なんと嘆かわしい！
記憶を失うのみならず
そこまで錯乱して
しまうとは……
おのれ…
おのれぇッ！
神はどこまで
残酷な仕打ちを！

貴公いったい何を言っている？ そもそも私は――
ジャンヌ貴女が認められないのも無理はない
かつて誰よりも激しく誰よりも敬虔に神を信じていた貴女だ
それが神に見捨てられ何の加護も救済もないままに魔女として処刑されたのだ
おのれを見失うのも無理はない
この男は……
目覚めるのですジャンヌ！
これ以上神ごときに惑わされてはならない！
貴女はオルレアンの聖処女フランスの救世主たるジャンヌ・ダルクその人なのだ！
いい加減にしろ！見苦しい！
我が身はセイバーそして貴様はキャスターの英霊
我らは共に聖杯を懸けて鎬を削るサーヴァントここで巡り合った縁などそれ以上でもそれ以下でもない

……セイバー
その男には何を
言っても無駄よ
【青髭】こと
ジル・ド・レェ伯爵
フランス救国の英雄として
元帥の座にまで登りつめながら
その栄光に背を向けて
黒魔術の背徳と淫欲に耽溺し
ついには数百人もの少年を
虐殺するまでに到った
『聖なる怪物』

ジルの狂気への凋落は
彼と共に戦った女傑ジャンヌが
悲運の末路を辿るのと時期を
同じくしていることから
両者を関連づける伝承は数多い

でもセイバーの容姿が
彼女と似ていても
瓜二つということはないはず

なのにジル――

ジャンヌ
もはや御自身を
セイバーなどと
御名乗り召さるな

キャスターは
セイバーを彼女本人だと
完全に信じきっている…

私をキャスターなどと
御呼び召さるな

既に我らは
サーヴァントなどという
頚木に繋がれてはいない

聖杯戦争は既に
決着している！

それはまた
随分な意見ね

ねぇジル元帥
戦いが終わった
というのなら
一体聖杯はどう
なったのかしら？

勿論万能の釜たる願望機は
既に我が手に収まっている
何人と競い争うまでもなく
既に我が願望は成就した！
戦うまでもなく聖杯は
このジルを選んだのです！
なぜならば我が唯一の願望
聖処女ジャンヌ・ダルクの
復活がまぎれもなくここに
果たされているのだから!!

我ら英霊すべての祈りを
それ以上愚弄する
というのなら――
次は手加減抜きで斬る

さぁ立て
平伏した者を斬るのは
主義に反する
貴様も武人の端くれならば
妙な詭弁を弄するのでなく
尋常に戦い抜いて
真に聖杯を掴むがいい
……
もはや言葉だけでは
足りぬほど……
そこまでに心を
閉ざしておいでか
致し方ありますまい
それなりの
荒療治が必要
とあらば次は
相応の準備を整えて
まいりましょう

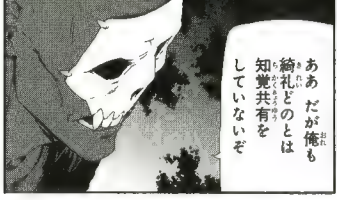
ぐうん
この男
断じて容易い
敵ではない――

誓いますぞジャンヌ
この次に会うときは必ずや
貴女の魂を神の呪いから
解放して差し上げます

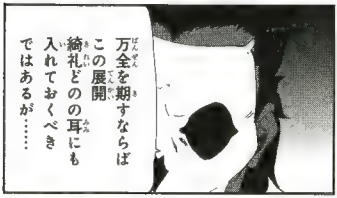
ぐったり
会話の成立しない相手って……疲れるわよね
全くです この場で妄言を償わせてやりたかった
は～～
――と言いたいところですが…
正直に言えばキャスターの方から退いたのは今夜の私にとって僥倖だったかもしれません
え そうなの？
魔術戦に特化したキャスターの座に対しては最強の抗魔力を備えたセイバーの座こそが鬼札
真っ向から勝負する限りにおいてはセイバーが圧倒的な優位のはずなんだけど
あのキャスターは……何かが違います
あるいは尋常な言葉での魔術師とは違うのかもしれない
確証はないのですが……左手を封じられた今の状態で相手するには危険すぎる敵のように感じました

兎にも角にも
まずランサーね……
はい
幸いあのランサーは
高潔な戦士です
逃げも隠れも
しないでしょう
彼もまた私との決着を
望んでいる
でもセイバー……
サーヴァントが
いかに騎士道精神に
溢れていようとも
そのマスターも
同じとは
限らないのよ…

キャスターの気配が
遠ざかっていく
追わぬ手はあるまいて


ああ だが俺も
綺礼どのとは
知覚共有を
していないぞ

では
頼めるか？

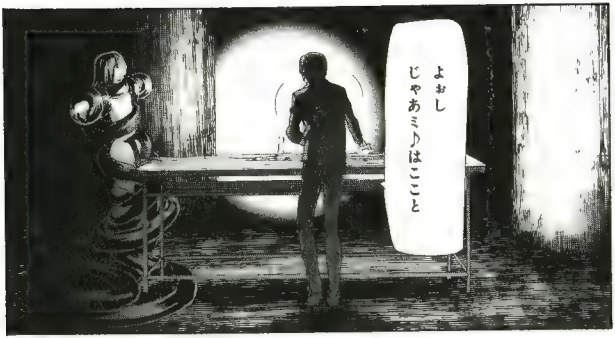

万全を期すならば
この展開
綺礼どのの耳にも
入れておくべき
ではあるが……

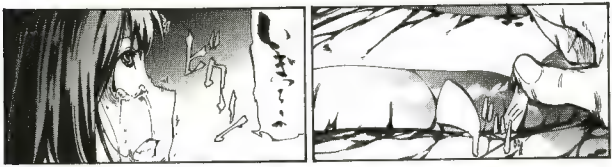
うむ
おぬしは引き続き
セイバーらを追尾せい

その役は私が
引き受けましょう

ブロロロ
いやぁぁ…
えぐえぐ…

ﾅﾝﾃﾞ…
ﾅｲﾃﾙﾉ
ﾎﾞｸﾊ


よぉし
じゃあミ♪はここと


いぎぃ…

はーい
それじゃあ
ワンス・モア・タァイム
ド〜♪
し〜♪
ミ〜〜〜♪

……んん？
さっきと違う…
あっちゃぁ……
爺ったなぁ
ぺたん
考えてみれば
同じところ
刺激したからって
毎回同じ悲鳴を上げる
とは限らないよなぁ
また失敗かぁ……
落ち込むことは
ありません
リュウノスケ

何事も最初の発想が大切です
たとえ満足行く結果が出なくても挑戦する行為にこそ意義があるのです

旦那！
オレ今度はこの子の腸を鍵盤にして悲鳴で歌うオルガンを作ろうと思うんだ！
旦那はどう思う!?
素晴らしい
それは良いアイデアですよリュウノスケ
それでは素材が簡単に壊れないように治癒再生魔術をかけておいてあげましょう
痛覚も麻痺しては困りますねぇ
旦那が応援してくれてるんだもっと頑張らなきゃ
失敗を恐れちゃダメだすべてはトライ・アンド・エラー！
全ての道も一歩から
ともかく前向きに考えようこの人間オルガンにしても諦めるにはまだ早い！

ズズズ
あおかえり
旦那
ズ
あれ？
出かけるの嫌がってたのになぁ
旦那ゴメン
やっぱオルガン
駄目だったわ
でもオレさぁ——
——足りない
え？ あうん
それはオレも
気付いたんだけど……
ヒッ

まったく
足りていません！
この程度では！
あぁ!?
そ そんなぁ
忌まわしくも神めは
いまだジャンヌの魂を
束縛したまま放さない！
いまだ瀆神の生贄が
足りないのです！

チャンスって
あの娘のこころの
灰絡みかな
心を引くかけらの
この世界において
神の聖性などもはや
まやかしにすぎないのだ
という現実を彼女に
知らしめねばなりません
世界に救済などないのだと
子羊の祈りなど決して
天には届かないのだと！
もはやただ
神を尊めるだけでは
済まされない！
我々は証明しなくては
ならないのです
神威の失墜を
神の愛の虚しさを！
神は既に裁きを
下すこと能わず！
いかなる非道も
悪徳も
決して神罰には値せず！
そうですね
リュウノスケ！
ああ解るよ旦那
神なんてのは
マスかきしか
能のねぇ
チキン野郎だ
旦那の方が
よっぽどCOOLだ

しからばッ！
我らはさらなる背徳を！
さらなる冒瀆を！
瀆神の生贄を
山と積み上げ
しかと彼女の前に
示すべし！
そりゃつまり……
これからは質より
量ってこと？
そうです！
その通りです！
……
さすがはリュウノスケ
ちゃんと心得ている
ではありませんか！

さて
リュウノスケ
いま牢にいる
子供たちは
何人です？
なんか……
勿体ないなあ
……
……生きてるのは十一人
そのうち三人ばかりは
ちょっと遊んじゃって
壊れかけ
宜しい
まずはその十一人から
速やかに贄とします
すぐにも始末し
朝が来るまでに
新しい子供たちを
補充しましょう
ねぇリュウノスケ
このさい客畜は
禁物ですよ
この世界の生命は
全て我らの財産
そう思って王侯の
余裕を持つのです
浪費なさい
汲めども尽きぬ
己の財を知りなさい
そうやって貴方は
私のマスターたるに
相応しい風格を
身につけねばならない
王様かぁ……
でもなぁ…
使い道ってのも
大事だと思うん
だけどさぁ……
リュウノスケ
この資本主義とやらに
毒されきった時代に
生を享けた貴方には
抵抗のある概念かも
しれません
だが心得なさい
貴族にとって浪費とは
美徳なのです

富を持つ者は皆
それを誇りとして
世に示す義務を持つ
そうやってこそ
富とは輝きを放ち
意味を持つのです
うん……
でも…
あの子のあの顔——
本当に可愛かったのに

第 15 話

だが俺は遠坂時臣を……

六人すべての敵を倒し聖杯を手にするまで死ぬわけにはいかない！

一年前(いちねんまえ)——

あら 雁夜くん
三カ月ぶりかしら
今度の出張はずいぶん
長くかかったのね
ああ……まぁね
凛ちゃん
カリヤおじさん
おかえり！
またオミヤゲ買って
きてくれたの？
凛
お行儀の悪い…
ゴッ

わぁ キレイ…
おじさん
いつもありがとう
大事にするね
気に入って
くれたのなら
おじさんも嬉しいよ
なぁ 桜ちゃんは
どこにいるんだい？
桜はね
もう
いないの

どういうことなんだ……？
桜はね
もう私の娘でも…
凛の妹でもないの
あの子は
間桐の家に
行ったわ
間…桐——

そんな……
一体どういうことなんだ 葵さん!?
訊くまでもないことじゃない？
特に雁夜くん あなたなら
間桐が魔導師の血筋を嗣ぐ子供を欲しがる理由 あなたなら解って当然でしょう？
どうしてそんなこと……許したんだ？
あの人が決めたことよ
古き盟友たる間桐の要請に応えるとそう遠坂の長が決定したの
……私に意見できるわけがない
……それでいいのか？

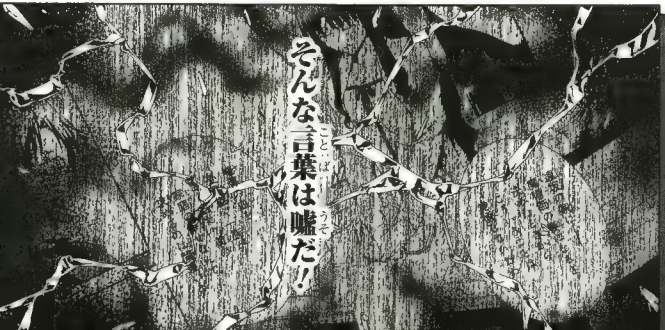
遠坂の家に――
魔術師の妻になると
決めたときから
こういうことは
覚悟していたわ
魔導の血を
受け継ぐ一族が
ごく当たり前の
家庭の幸せなんて
求めるのは間違いよ
っ……
これは遠坂と
間桐の問題よ
魔術師の世界に背を
向けたあなたには
関わりのない話
もしも桜に会うような
ことがあったら
優しくしてあげてね
あの子
雁夜くんには
懐いてたから

パチャ
『それでいいのか？』

八年前のあの日
彼女が若き魔術師の
プロポーズを
受け入れたとき
その笑顔はたしかに
幸福を信じていた

そしてその微笑みを
信じたからこそ
敗北を受け入れた

だがそれは間違っていた



魔術がいかに素晴らしく
唾棄すべきものか
痛感したからこそ
親兄弟と決別してまで
去ったのではないか
実のに誰よりも
大切なものを失ったと絶望
よりによって誰よりも
魔導師然とした男に
譲ってしまった
俺は一度ならず二度までも
同じ言葉を間違えた！
これでいいのか
そうではなく
それはいけないと
言うべきだった
もし八年前のあの
そう断じて奏さんを
引き留めていれば
呪われた命運とは
無縁の人生を歩んでいたかもしれない
もし今日
そう断じて遠坂
魔術の決定に
異を唱えていれば
奏さんはあんな風に
自分だけを責める
ことはなかった
涙を飲み込むような
思いをさせずに済んだ

二度の過ちを償う術はここにはない
夢って自分が育ち続けた世界
我が身かわいさに投げ出した魂
だが今ならば対決できる
この世でただ一人
失いたくなかった
女性を想うなら

間桐の家が
とんでもなく
恥さらしな真似を
してるという
噂を聞いた

遠坂の次女を
迎え入れたそうだな

そんなにしてまで
間桐の血筋に
魔術師の因子を
残したいのか？

その面
もう二度と
ワシの前に晒すでないと
確かに申しつけた筈だがな

それを詰るか？

他でもない貴様が？

いったい誰のせいで
ここまで間桐が零落
したと思っておる？

鶴野めが成した息子には
ついに魔術回路が
備わらなんだ
間桐の純血の魔術師は
この代で潰えたわ

おぬしが素直に家督を
受け継ぎ間桐の秘伝を
継承しておればここまで
事情は切迫せなんだ

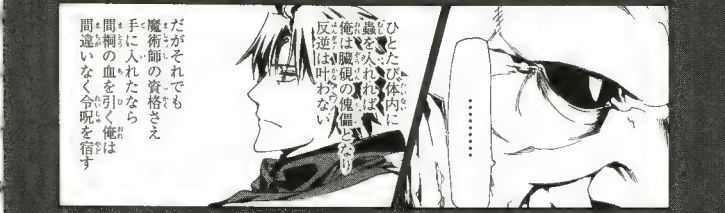
それを貴様
という奴は……

茶番はやめろよ吸血鬼
あんたが今さら
間桐一族の
存続なんぞに
拘ってるとでも？
笑わせるな
新しい代の間桐が
産まれなくても
あんたには何の
不都合もあるまい
二百年なり
千年なりと
あんた自身が
生き続ければ
済む話だろうが
……フン
相変らず
可愛げのない奴よ
身も蓋もない
物言いをしおって
確かにワシはおぬしや
鶴野の息子よりも
なお後々の世まで
生き長らえること
じゃろうて
だがそれもこの
日毎に腐れ落ちる
身体をどう保つかが
問題でな
跡継ぎは不要でも
聖杯を勝ち取るためには
間桐の魔術師は必要でのう

結局はそれが魂胆か
延命魔術による
仮初の不老不死を
完璧なものにする
あんたが何百年も
生き続け
聖杯に望むのは
それだけだろう
六〇年の周期が
来年には巡り来る
だが四度目の聖杯戦争には
間桐から出る駒がない
鶴野程度の魔力では
サーヴァントを
御しきれぬ
現にいまだ令呪すら
宿らぬ有様じゃ
じゃがな
此度の戦いは
見送るにしても
次の六〇年後には
勝算がある
遠坂の娘の胎盤からは
さぞ優秀な術者が
生まれ落ちるであろう
アレはなかなか器として
望みが持てる

堪えろ…
臓硯は強大な魔術師だ
俺には交渉以外の選択肢はない……
ニィィ
――そういうことなら聖杯さえ手に入るなら遠坂桜には用はないわけだな？
……おぬし 何を企んでいる？
取引だ
俺は次の聖杯戦争で間桐に聖杯を持ち帰る
それと引き換えに遠坂桜を解放しろ

カッ 馬鹿を言え
今日の今日まで
何の修業もしてこなかった
落伍者がわずか一年で
サーヴァントの
マスターになろうだと？
あんたお得意の
蟲使いの技ならそれを
可能にできるだろう
俺に『刻印虫』を植えつけろ
この身体は薄汚い
間桐の血肉で出来ている
他家の娘なんかよりは
よほど馴染みがいいはずだ


……
ひとたび体内に
蟲を入れれば
俺は臓硯の傀儡となり
反逆は叶わない
だがそれでも
魔術師の資格さえ
手に入れたなら
間桐の血を引く俺は
間違いなく令呪を宿す

確かにおぬしの
素養であれば鶴野
よりも望みはある
刻印虫で
魔術回路を拡張し
一年間みっちりと鍛え
抜けばあるいは――……
…それにしても
解せぬな
なぜ小娘一人に
そうまでして拘る？

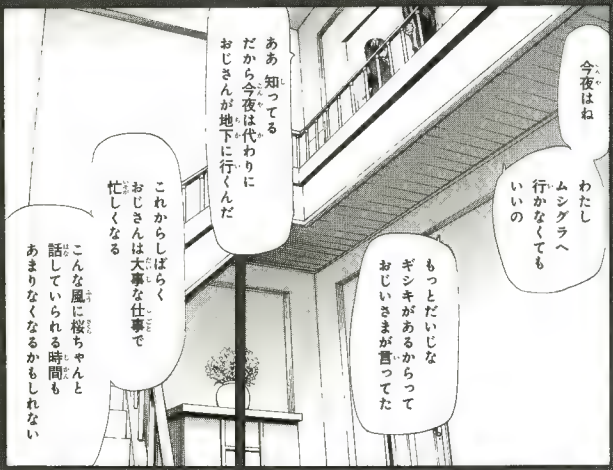
間桐の執念は
間桐の手で
果たせばいい
無関係の他人を
巻き込んでたまるか
爺い
まさか！
カカカ しかし雁夜
巻き込まずに済ますのが
目的ならばいささか
遅すぎたようじゃのう？
遠坂の娘が当家に来て
何日目になるか
知っておるのか？

初めの三日は
そりゃあもう散々な
泣き喚きようだったが
四日目からは声も
出さなくなったわ
さて どうする？
すでに頭から爪先まで
蟲どもに犯されぬいた
壊れかけの小娘一匹
それでもなお
救いたいと申すなら
考えてやらんでもない
今日などは明け方から
蟲蔵に放り込んで
どれだけ保つか
試しておるのだが
半日も蟲どもに嬲られ
続けてまだ息がある
なかなかどうして
遠坂の素材も
捨てたものではない
……異存はない
やってやろうじゃないか

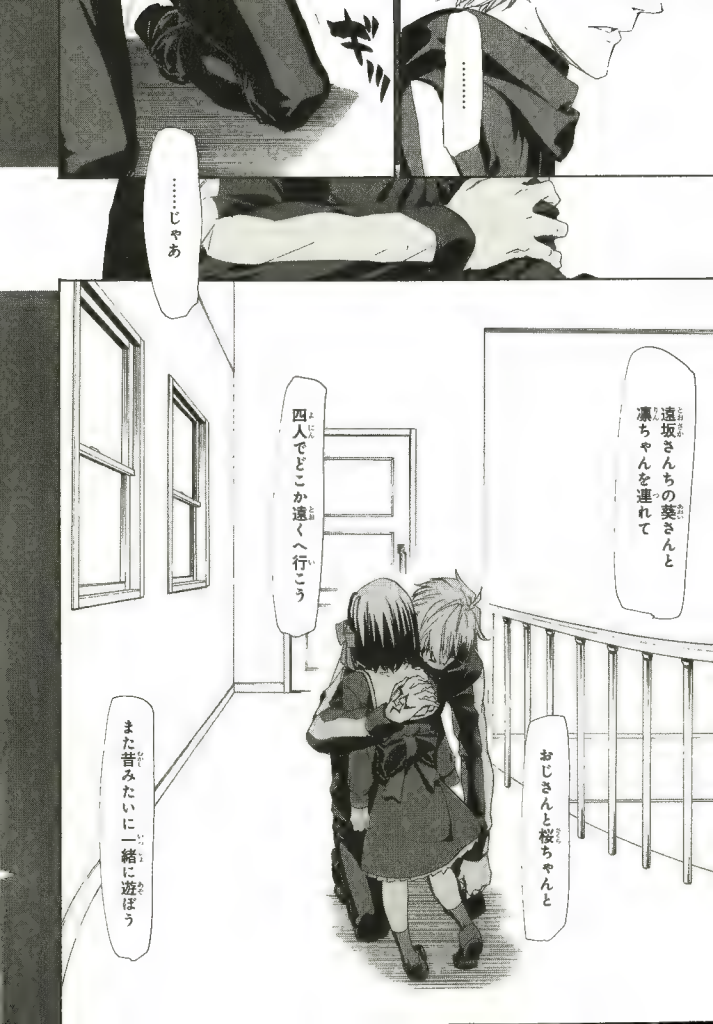
まぁせいぜい気張るがいい
だが貴様が結果を出すまでは引き続き桜の教育は続行するぞ
ワシの本命はあくまで次々回の機会じゃ
アレの産み落とすであろう子供の方がはるかに勝算は高い。
今度の聖杯戦争は負け戦と思って最初から勝負を捨ててかかる
だがそれでも万が一貴様が聖杯を手にするようならば――
応ともそのときは無論遠坂の娘は用済みじゃアレの教育は一年限りで切り上げるとしよう
……二言はないな？ 間桐臓硯
雁夜よ ワシに向かって五分の口を利こうと思うならまずは刻印虫の苦痛に耐えて見せよ
まずは一週間 蟲どもの苗床になってみるが良いそれで狂い死にせずにおったならおぬしの本気を認めてやろうではないか

一年
耐えきった
左半身は神経がやられて
まともに動かない
しかし刻印型の肉体への
負荷が想定以上だ
内臓機能も落ちてもはや
固形物は喉を通らなくなった
この命
もう長くはないだろう…

……やぁ
桜ちゃん
びっくり
したかい？
うん
顔
どうかしたの？
ああ
ちょっとね
また少しだけ
身体の中の「鬼」に
負けちゃったみたいだ
カリヤおじさん
どんどん違う人
みたいになっていくね
おじさんはきっと
桜ちゃんほど我慢強く
ないんだね
ハハ
そうかも
しれないね
――君もだよ 桜
桜ちゃんが側にいるの
無理ないよ……
そっとしておくんだから
鏡で見た自分でさえ
身体の中の「鬼」に
負けちゃったみたいだ


今夜はね
わたし
ムシグラへ
行かなくても
いいの
もっとだいじな
ギシキがあるからって
おじいさまが言ってた
ああ 知ってる
だから今夜は代わりに
おじさんが地下に行くんだ
これからしばらく
おじさんは大事な仕事で
忙しくなる
こんな風に桜ちゃんと
話していられる時間も
あまりなくなるかもしれない

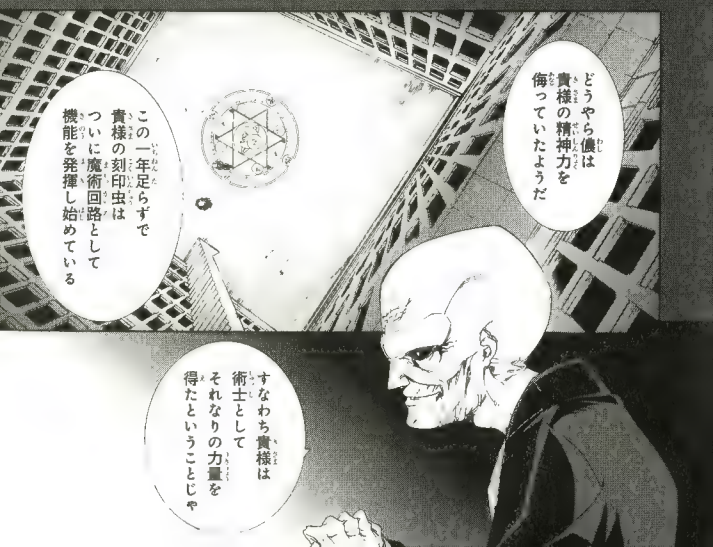
なぁ桜ちゃん
そう……
おじさんのお仕事が
終わったらまた皆で一緒に
遊びにいかないか？
お母さんやお姉ちゃんも連れて
お母さんや
お姉ちゃんは……
そんな風に
呼べる人は
いないの
いなかったんだって
思いなさいって
そう おじいさまに
言われたの


……
ギッ
……じゃあ
遠坂さんちの葵さんと
凛ちゃんを連れて
四人でどこか遠くへ行こう
おじさんと桜ちゃんと
また昔みたいに一緒に遊ぼう

——あの人たちとまた会えるの？
ああ
きっと会える
それはおじさんが約束してあげる
——しゃあおじさんはそろそろ行くね
うん

ばいばい
カリヤ
おじさん
俺の命は
桜ちゃんと
葵さんのために
使うと決めている
だがもし桜ちゃんを
葵さん2人の元に
返せたとしても
彼女の精神が
致命的なところまで
壊れていたら

手遅れになってくれるな


どうやら儂は
貴様の精神力を
侮っていたようだ
この一年足らずで
貴様の刻印虫は
ついに魔術回路として
機能を発揮し始めている
すなわち貴様は
術士として
それなりの力量を
得たということじゃ

じゃが肉体の崩壊が
随分と早いのう
貴様の命は
もって一ヶ月と
いったところか
それだけもてば十分だ
聖杯戦争は
二週間もあれば
片が付く
ならば雁夜よ
いよいよ今宵
貴様には
サーヴァントを
召喚してもらう
召喚の呪文には
途中に二節
別の脈唱を
差し挟んで
もらうぞい
どういう
ことだ？
おぬしの魔術師
としての格は
他のマスターどもに
些か以上に劣るのでな
サーヴァントの
基礎能力にも
影響しよう
おぬしには
「狂化」の属性
付加によって
パラメーターの
底上げがなされる
「バーサーカー」を
召喚してもらう

かって拒んだ運命が巡り巡って
何の咎もない桜ちゃんの上に降りかかった
その贖罪としてせめて
彼女の未来だけでも取り戻す
加えて聖杯を手にするために
残る六人のマスターを
殺し尽くすというのであれば
ガクガク
桜ちゃんと葵さんに
悲劇をもたらした当事者たちの
少なくとも一人にはこの手で
引導を渡してやれる

第15話／END

Staff/ 錦山まる、春乃えり

予告

爆破解体（デモリッション）

願いが灰燼（かいじん）に帰するとき

運命はまた一歩

始（はじ）まりに近づく

Kadokawa Comics A

Fate/Zero 第④巻へ続く

Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

Fate/Zero ③

漫画

真じろう

原作：虚淵玄（ニトロプラス）／TYPE-MOON

2012年4月4日初版発行

発行者

新名 新

発行 株式会社角川書店

〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3 電話／(03)3238-8541(編集)

発売 株式会社角川グループパブリッシング

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 電話／(03)3238-8521(営業)

http://www.kadokawa.co.jp

装幀・デザイン

和田幸男

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大日本印刷株式会社

初出／『ヤングエース』'11年11月号～'12年3月号

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁本は、ご面倒でも角川グループ受注センター読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。

2012 KADOKAWA SHOTEN, Printed in Japan

©Shinjiro 2012 ©Nitroplus/TYPE-MOON

ISBN978-4-04-715819-1 C0979